48

Colles骨折の嚆矢
——フランス人医師 Claude POUTEAU

清水陽人

橈骨下端骨折（定型的橈骨骨折）は、この骨折を詳しく記載したアイルランド人の外科医 Abraham Colles（一七七三―一八四三）の名をとり Colles 骨折といわれてきた。

そしてこの骨折について、彼の投稿記載（Edinburgh Medical and Surgical Journal. April 1814）が世界の嚆矢とされ、今日まで語り伝えられてきた。事実、日本においても、神中整形外科を始め、幾多の教科書、「整形外科三世紀の光芒」、「今日の整形外科治療指針」等の参考書にいたるまで、二十一世紀に入った今日でもその言及に何ら変化はみられない。しかし私自身一九七〇年代、R. JUDET「A CTURALITÉS DE CHIRURGIE ORTHOPÉDIQUE」等の francophone（フランス語圏）の文献に接する折り、この骨折は、常に Pouteau-Colles 骨折と記載されており、Colles の前になぜ Pouteau があるのか、その後一つの疑問を持ったまま数十年が過ぎた。

しかるに昨年、第九回日仏整形外科学会があり、そこでフランス側関係者から次の事実を確認した。

フランス語圏では、Pouteau 骨折とも Colles 骨折とも単独にはいわれない。Pouteau は Colles が生れたその年にこの骨折を記載発表したのであり、逆に Colles は、自身発表の明確性を考慮してか同世界では二重読みされている。他のヨーロッパ語圏ではこの骨折の呼称は不明だが、germanophone（ドイツ語圏）での呼称は興味あるところである。なぜなら日本の整形外科がどの時点で Colles 骨折としたことにも触れるからである。これとは別に徹底しているのは anglophone（英語圏）である。Pouteau の名は無視されたのか等閑視されたのか終始一貫 Colles 骨折であり、たとえば Watson-Jones（一九〇二―一九七二）「Fractures and Joint Injuries」はその典型であるが、一九四〇年の初版から今日に到るまで Colles が嚆矢とし、その主張は変るところがない。

「ŒUVRES POSTHUMES DE M. POUTEAU」は、

Claude POUTEAU（一七二五―一七五五）没後、一七八三年パリで発刊された。この遺作は、三巻からなる大部で、橈骨下端骨折の嚆矢は、第二巻の二五一頁から十六頁にわたって詳しく記載されている。その内容は、前腕の解剖、受傷起点、整復、固定、結論に別けられるが、前腕の解剖は、主要部分は橈骨と尺骨であるとし、両者は少し内側に向って逆向き方向にアーチ状となっており、結論的に外側につき出た凸面は、非常に傷つきやすいとしている。関係する筋肉は四つであり、回外運動に長回外筋、短回外筋、回内運動に円回内筋、方形（回内）筋がある。受傷時、手は突然防御態勢を固めること、身体の全体重を支えることを余儀なくされ、四つの筋肉の最もつよい収縮が、激しいいきおいで前腕の骨のアーチ部分に影響を及ぼし、瞬時にしてこの筋収縮力に等しい強度が加わり、結果的に骨のアーチ部分への破壊陥没と骨折がおこるとしている。整復は、むずかしく骨の折れる容易なことではないとし、骨折の両側に布きれの巻き物を置いて圧迫しつつ牽引を加え、目一杯になっているその一時に骨折に圧迫を加えるとしている。掌側尺側方向への牽引は、整形外科の常識であるが、この言及はない。固定は、中途半端な副木や包帯を禁じ、布きれか麻屑の巻物を置き、これを一部鉄で補強した包帯で覆い、なおかつ小平板か副木をあてた。必要あればさらに大きい鉄具で固めた。しかしどんなに正確な整復をしても、この骨折を固定しつづけるむずかしさについて患者に予告しなければならないとしている。結論としては、この骨折について、方形筋の回内力の介在を帰結にあげている。

以上、この骨折の嚆矢となった遺作を中心に、パリで出会った有名な医師と本人の肖像、リヨン帰郷後、エピソード等、その生涯について述べる。

（新潟市）